View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

遠藤周作における軽小説の意味

―『おバカさん』を中心に―

汐田峰子

（一）

遠藤周作は昭和二十二年、評論『神々と神と』で文壇に登場して以来現在まで、多岐に渡ってその創作活動を続けている。最初の数年はフランスカトリック文学と近代日本文学についての評論を書いていたが、昭和二十九年処女小説『アデンまで』を発表し、翌年、第三作目の小説『白い人』が第三十三回芥川賞を受賞してからは、主に小説家として活動することになる。小説執筆の傍ら「雲谷斎狐狸庵」先生として、数々のユーモア溢れるエッセイ集を発表していることはあまりにも有名であろう。

処女小説『アデンまで』から現在に至るまでの約四十年の間に、遠藤が発表した小説は多数にのぼるが、それらの作品は通常、大きく二つの群に分けて捉えられている。

一つは、『白い人』（昭和三十年）、『黄色い人』（同）に始まり、『海と毒薬』（昭和三十二年）『沈黙』（昭和四十一年）『侍』（昭和五十五年）等に代表される「純文学的作品群」、もう一つは『おバカさん』（昭和三十四年）『ヘチマくん』（昭和三十五年）『わたしが・捨てた・女』（昭和三十八年）『さらば、夏の光よ』（昭和四十年）等から成る「軽小説的作品群」である。（二つの群の名称は様々であるが、本稿では武田友寿氏の語を使用する。）

外観上、この二つの作品群の違いは明らかである。まず、最も大きな相違点は、「純文学的作品群」（以下純文作品と略）ではその中心に据えられているキリスト教の臭いが、「軽小説的作品群」（以下軽小説と略）においては（少なくとも表面上）ほとんど感じられないことであろう。

また、小説の舞台が純文作品では十七世紀の西欧（『侍』）であったり、ナチス占領時のフランス（『白い人』）であったり、鎖国時代の日本（『沈黙』）であったりと多彩なのに比べて、軽小説ではそのほとんどが現代の日本である。文章の構成にしても純文作品では手紙・手記形式（『白い人』『黄色い人』『沈黙』）、複数の主人公による独白（『黄色い人』『死海のほとり』）、回想による時間の逆行（『海と毒薬』）等の方法を使って複雑な仕上がりを見

せているのに対し、軽小説は三人称によって、時間の流れ—ある事件の流れ—をそのまま語っているものがほとんどであり、文章自体もかなり平易で読みやすい。

更に純文作品が所謂〝文芸誌〟に発表されたもの、又は書き下ろし作品として出版社から刊行されたものであるのに対し、軽小説の多くが新聞小説であることにも注意が必要であろう。

大まかに見て、以上のような点から、軽小説は純文作品に対して通俗的であるという見方が強い。又、遠藤自身が日本では珍しいキリスト教作家であるために、キリスト教の問題を正面から扱っている純文作品の方に世の注目が集まりがちである。

現在、〝遠藤周作論〟と題する論文集が幾冊か発表されており、文芸誌においても繰り返し遠藤の特集が組まれているが、それらの中で取り扱われる作品は、ほとんどが純文作品である。軽小説については、全く触れられないか、或いは触れられても純文作品の補足という扱われ方にすぎない。昭和五十年に新潮社から発刊された『遠藤周作文学全集』(全十一巻)を見ても、中に収められているのは、それまでに発表された初期の評論と純文作品であり、前掲した軽小説は一作も収められていない。このことからも軽小説が一般にどのように評価されているかが知り得よう。

しかし、遠藤の軽小説は本当に—その名の通り—軽い内容の娯楽小説なのだろうか。軽く扱われてもよい作品なのだろうか。

軽小説の一つ、『わたしが・棄てた・女』(講談社文庫)の解説で、武田友寿氏は次のように述べている。

遠藤文学の愛読者でも、純文学的作品の読者は氏の軽小説的作品を真面目に読もうとしないし、軽小説的作品の愛読者は重たい主題の純文学的作品を難しいといって敬遠するきらいがある。ぼくはこのような傾向に長い間疑問をいだき、また反撥を感じてきた。(略)純文学的作品を好んで軽小説的作品を厭い、軽小説的作品を愛好して純文学的作品を敬遠するという態度は、読者の気儘な好みか、さもなければ、遠藤文学にたいする理解の欠如にもとづくものであって、読者みずからが豊かな遠藤文学の享受を閉ざしていることになるだろう。

武田氏は、遠藤の軽小説はもっと評価されてしかるべきだと主張する。

では、一見通俗的と見られている一連の軽小説は、遠藤文学において、どのような意味を持っているのだろうか。

今回は遠藤第一作目の軽小説とされる『おバカさん』に焦点をあて、その意味するものを探っていきたい。

(二)

『おバカさん』は、昭和三十四年三月から八月まで、朝日新聞に連載された。

ある春の日、銀行員隆盛と貿易会社に勤める妹・巴絵兄妹に、一通の奇妙な手紙が届いた。誤字脱字だらけで、解読困難なその

手紙の差出人は、八年前隆盛が文通していたフランス人、ガストン・ボナパルトで、近々日本にやって来るという。期待に胸を膨らませて出迎えた兄妹の前に現れたのは、「知性のひらめきなど一片だにない」「山イモのオバケのような馬づら」をした大男だった。

兄妹の案内で東京見物をしたガストンが興味を示すのは、「東京タワーでも鎌倉の大仏でもなく」、「イヌさんとコドモさん」ばかりである。更にガストンは、「もっと多くの日本人を知るため」に、兄妹の家を出て行くという。実はガストンはある「修行」のために日本に来たのだった。

どんな人間も疑うまい。信じよう。だまされても信じよう――これが日本で彼がやりとげようと思う仕事の一つだった。疑惑があまり多すぎるこの世界、互いに相手の腹のそこをさぐりあい、決して相手の善意を認めようとも信じようともしない文明とか知識とかいうものを、ガストンは海のむこうに捨てて来たのである。今の世の中に一番大切なことは、人間を信じる仕事――思かなガストンが自分に課した修行の第一歩がこれだった。

「ナポレオン」と名付けた、「やせこけきたならしい」「イヌさん」を連れて、ガストンは東京を彷徨する。一見馬鹿にしか見えず、いつも他人の言葉を額面通りにしか受け取れない彼は、行く所々で様々な事件を巻き起こしながらも、必死で「人間を信じよう」とする。そしてある日、肺病のインテリ殺し屋遠藤と出会うのである。

遠藤は大学出のエリートでありながら、兄を無実の罪に陥れた小林に復讐するために殺し屋になった男である。血を吐きながら復讐を誓う遠藤が、ガストンの目には「イヌさん」と同様、あわれな哀しい存在として映る。

「遠藤さん行くなら、わたしも一緒に行くね」

「遠藤さんのことスキね、助けたいです」

（略）

「遠藤さん、一人ぼっち。一人ぼっちだからトモダチ、いりますね」

（略）

「これ、わたしの決心」

「なんだって…なにがお前の決心なんだ」

「あなた捨てないこと…ついて行くこと」

馬面の外国人が殺し屋と一緒にいるという噂を聞きつけてやって来た隆盛兄妹が止めるのも聞かず、ガストンは遠藤の後を追うが冷たく拒絶される。

「エンドさん、わたしキライか」

「ああ…シンのシンからキライだ」遠藤はうす笑いをうかべて肯いた。「君の長い、そのとぼけた顔を見ると吐気さえする。」

（略）

結局、なにを自分はこの日本に来てやったのだろうか・・・やったことといえば、人々の邪魔になることだけ、野良犬のようにうろつくことだけ、そして遠藤のように手をさしのべた男からさえも憎まれることだけだった。（略）自分は遠藤の心をひるがえさせたり、そのすさんだ気持をしずめてやることさえできない。ただあとをついていくことしかできないのである。

罵られ、殴られながらもガストンは遠藤の後を追い続ける。そしてとうとう、遠藤は兄の仇、小林を沼のほとりにおびきだすことに成功し、拳銃を片手に復讐を決行しようとするのである。

「ダメ、ダメ。そのことダメ」

ガストンは、何とか遠藤が殺人を犯すのを防ごうと二人の間に割り込むが、かえって小林からシャベルで幾度も殴り付けられるはめになる。血まみれになりながらもガストンは必死に叫ぶ。

「ノン、ノン、エンドさん」

「わたしのお願い・・・」

（略）

（引け、引くんだよ）

「ノン、ノン、わたしのお願い」

極度の緊張の中、病に蝕まれた遠藤は気力が尽きてその場に倒れる。小林は血だらけの外人に「恐怖」を覚えその場を走り去った。隆盛兄妹の通報で警察が現場に到着した時、沼の傍には遠藤が倒れていただけで、馬面の外人はどこにも見当たらなかった。遠藤は気絶する瞬間に、一羽のシラサギが飛び去っていくのを見たという。ガストンはまるでそのシラサギのように、どこかへ消え去ってしまったのである。

確かに娯楽性の強い作品ではある。主人公はどこからともなくやって来て、どこへともなく消えていく馬面の外国人である。使用される言葉も平易な語ばかりであるし、何より生き生きとした会話文が巧みで笑いを誘う。ガストンの怪しい日本語と、巴絵の気取ったお嬢様言葉。遠藤は変なヤクザ言葉を使うし、妙な関西弁や九州弁を使う人物も登場する。血を吐きながら復讐を誓う殺し屋・・・というとまるでハードボイルドの世界だが、ガストンが絡むとその復讐劇も滑稽なものに転じてしまう。又、純文作品では繰り返し使われる「神」「キリスト」「聖母」「十字架」というような言葉がこの作品では一切使われていない。（同じ軽小説でも『わたしが・棄てた・女』では、主人公ミツが不思議な声を聞き、十字架の幻を見る場面がある。）

このような点から、『おバカさん』はそれ以前に遠藤が発表した『白い人』『黄色い人』『海と毒薬』等の純文作品とは趣向の異なった作品と解され、軽小説の第一作目に位置づけられてしまったのであろう。

しかし、『おバカさん』は面白いだけの小説ではない。ガスト

ンのあの哀しいまでの一途さ、純真さは一体何なのか。彼は一体何者なのか。そういう疑問が当然沸き起こってくるだろう。

遠藤自身は、『聖書の中の女性たち』（昭和三十三年）のなかで次のように述べている。

私は『おバカさん』という作品で、このベルナノスの『田舎司祭の日記』やモウリックの『仔羊』に描かれた主人公をもっと一般的な形で書こうとした。

「もっと一般的な形」とは――。では次にベルナノスの『田舎司祭の日記』を『おバカさん』と比較しつつ、見ていこう。

(三)

ジョルジュ・ベルナノス（一八八八～一九四八）は、フランスのカトリック作家で、フランソワー・モーリヤック、ジュリアン・グリーンと共に、遠藤がフランス留学中に研究し、最も影響を受けた作家の一人である。『田舎司祭の日記』はベルナノスの小説の中でも最高傑作とされている。

題名が示す通り、主人公たる語り手は北仏のとある田舎の教区の若い司祭である。病気がちで、重い遺伝（アルコール依存症）を背負った彼は、人格が特別優れているわけではなく、卓越した才能があるわけでもない。世渡りも下手で、善意から行ったことはそのほとんどが人々から理解されず、失敗に終わってしまう。

主人公の設定一つを取ってみても、『おバカさん』がこの作品から大きな影響を受けていることが分かる。主人公は、司祭という神に使える特別な職業を持つ人間ではあるが、聖人ではない。いやむしろ、健康に問題がある点、かなりの口下手である点が強調して描かれていることから、ある意味では常人よりも劣る人物という印象すら受ける。それは、ガストンが美形のフランス人ではなく、「知性のかけらもない」「馬づら」であることが繰り返し語られていることに通じよう。

司祭は毎日の生活を克明に日記に記す。どれくらい葡萄酒を飲んだか、健康状態はどうか、誰とどんな話をしたか、自分がどれだけ神を愛しているか――。

彼は新しいものを受け入れようとしない、保守的で、停滞した自分の教区を活性化しようと様々な提案をするが、人々には理解されず、かえって敬遠されるようになる。孤独に沈み、自己の無力を嘆く司祭――その姿はガストンが殺し屋遠藤の「心をひるがえさせたり」「しずめたり」することができず、「ただあとをついていくことしかできない」と自己の無力を嘆く場面を思い起こさせる。

司祭もガストンも自己が完璧な人間でないことを、自分が弱い只の人間にしかすぎないことを十分に自覚している。その弱さの自覚があるが故に他人の弱さに共感でき、自分を疎外する人さえも憎むことができないのである。ガストンにとって「一番イヤな仕事」は「人を憎む」ことであり、司祭は「他人の苦しみに対し

て」「恐れ」をさえ抱く。二人に共通しているのは、自分の弱さを自覚するが故に他人の弱さをも許し、全てを信じよう、愛そうとする姿勢といえよう。

ある日、司祭は大量に吐血し、医師のもとへ出かけるが、彼の体は既に癌に蝕まれており、余命幾許もないことが告げられる。驚愕し、苦悩する司祭。絶望の中で彼は懐疑―信仰―懐疑を繰り返す。この点が、この作品を単なる護教小説に終わらせていないところである。自らの不幸を知ったとき、人間は慌て、怯え、たとえ信仰を持つ者でもその運命を嘆かずにはいられまい。司祭の苦悩はどこにでもいる生身の人間を感じさせる。

司祭は恐怖に震えながらも、必死で思索を進める。そして、自分がありのままの人々を「ひじょうに愛した」ように、「怖いなら怖いと恥ずかしがらずに言」い、荘厳な死など望まず、人々に「あわれみをかきたてる」ような「ありのままの最後」を迎えることこそ、自分にできる「愛の行為」と考えることで、少しずつ心の平安を取り戻していく。

この作品の最後には、司祭の死を見取った友人の手紙が添えられている。死を迎えた司祭ははじめ「深い苦悶」の表情を見せたが、やがて「おだやかになり、微笑さえ浮かべていた」という。

遠藤は前掲した『聖書の中の女性たち』で、この作品について次のように記している。

この小説が私をもっとも魅了するのは主人公の田舎司祭が私たちと同じ地点から人生に生きていることだ。（略）その凡庸な、そして私たちと同じ弱さをもった男がこの小説の終りの頁をめくり終った時、いつか私たちの及ばぬ地点に、人生の崇高な部分を歩いていることに気がつく。それはなにか彼が特定の素晴らしい行為や死をえらんだためではない。（彼の死は私たちと同じように凡庸でみじめな外観をとっているのだから）

なにが彼をそうさせたか。なにが彼をそこまでいかせたか。

（傍点引用者）

最後の問いかけの答えを遠藤は記してはいない。しかし、その答えが、司祭の人々に対する、人生に対する、そして神に対する〈愛〉であることは一読して明らかであろう。凡庸な司祭は全てのものに対する〈愛〉故に少しずつ、「私たちの遠く及ばぬ」聖なるものへと転じていったのである。そこにはキリスト教でいう〈聖化〉の思想が感じられる。（聖化・・・sanctification キリストによって与えられる神の恩恵により、義と認められた者が精霊を受けて、潔められた人格を完成すること）

遠藤は『聖書の中の女性たち』で、〈聖化〉とは「低い人間性」を「より高い人間性」に変化させることだと説明している。凡庸な司祭がいつの間にか「人生の崇高な部分を歩いていることに気がつく」のは、彼が日常の中でそれと気付かぬうちに少しずつ〈聖化〉され、「より高い人間性」を獲得したからである。そし

て、その〈聖化〉の基盤となったのは、全てのものへの惜しみない〈愛〉であった。

この『田舎司祭の日記』の中に、〈愛〉故に〈聖化〉された人間の姿を見出した時、遠藤は深い感銘を受けたことだろう。その姿を多くの人に伝えたい、そう思ったかもしれない。

しかし、この作品―梗概は先に簡単に記したが―本文はかなり難解である。聖書の言葉が鏤められ、高度な宗教哲理が盛り込まれ、キリスト教用語に溢れている。西欧と異なりキリスト教の伝統のない日本では、そのままの形で受け入れられることは困難だろう。それ故「もっと一般的な形」―我々日本人にも実感できうるような形―で捉え直し、書き直す必要があったのではないか。

主人公を日本人にはあまり縁のない司祭から馬面の外国人へ、場所を北仏から東京へ移す。キリスト教の臭いのする語は一切使わず、日常的な言葉で、実にユーモラスに〝おバカさん〟ガストンは描かれている。しかし、遠藤が本当に描きたかったのは、凡庸な人間が全てを愛そうと努めることで少しずつ〈聖化〉されていく、その過程だったのである。

一見、ユーモア溢れる娯楽小説のような態をとってはいるが、実はこの小説も他の純文作品と同様、根底では深くキリスト教と結びついている。面白さに魅かれてこの小説の世界に入り込むことは、遠藤がキリスト教に関心のない日本人に警戒心を抱かせぬよう、周到に創り上げた、独特のキリスト教世界に入り込んでいくことに他ならない。

(四)

以上のように考えていくと、遠藤文学において純文作品と軽小説とを区別することは形態分類の上では意味があっても、内容的には全く意味がないといえるだろう。

更に、もし、『おバカさん』が純文作品と同じように遠藤のキリスト教観を示す作品であるとすれば、以後の遠藤文学の展開を考える上で、実に大きな意味を持っている。

遠藤は昭和四十一年『沈黙』を発表。従来父性的とされてきたキリスト教の〝母性的〟な面を前面に押し出し、共に苦しみ、全てを許す独特の〈母性的キリスト〉の姿を初めて明確に世に問うた。そのキリスト像が神学的に正しいかどうかについては疑問が残るものの、汎神的な日本と一神教であるキリスト教の融合を図った作品として、文壇では高い評価を得る。更に、昭和四十八年に発表された『死海のほとり』においては、〈母性的キリスト〉をより深化させた〈永遠の同伴者〉―いつも傍にいて、共に喜び共に苦しむ存在―としてのイエス像を確立する。

共に苦しみ、全てを許し、愛してくれる―それが遠藤の理解するキリスト教の神の姿なのだが、それはそのまま『おバカさん』のガストンのイメージと重なる。とすれば、既に『おバカさん』を発表した昭和三十四年の時点で、遠藤の理解するキリスト像は、

父性的なものから母性的なものへ移っていたと考えられる。また、ガストンの「あなた捨てないこと・・・ついて行くこと」「これ、わたしの決心」という台詞に、〈永遠の同伴者〉の萌芽も感じられよう。

更に、ガストンが、命がけで追い続ける殺し屋の名が「遠藤」であることにも注意が必要である。

遠藤がキリスト教を「体に合わない洋服」と表現し、それを自己の体に合う「和服」にするために努力してきたことは、多くの著書のなかで語られている。その過程では、信仰を棄てようと考えたことすらあったという。だが、遠藤は神を棄て去ることができなかった。神が遠藤を離さなかったからである。

私の場合は、自分の意志でなったんじゃないから（キリスト教信者に・・引用者注）親がくれた許婚みたいのと結婚させられているんだから、こんなもの出て行けというような感じなんだけど、出て行けと言っても、向こうが出ていかん。女房みたいにね。居座っているというような感じでした。

（『私にとって神とは』　一九八八年）

「出て行けと言っても」「出ていか」ない神と遠藤。そして、どこまでも追いすがっていくガストンとそれを拒絶する殺し屋「遠藤」。この奇妙な符合は偶然ではあるまい。ガストンと「遠藤」の関係に、自己と神とのつながりを投影させているとすれば、「おバカさん」は、遠藤自身の信仰告白の書と取ることも可能なのである。

遠藤が文壇に登場してから、約半世紀が過ぎようとしてる。その間純文作品は『沈黙』を中心に様々な研究がなされてきた。しかし、純文作品のみならず、軽小説や狐狸庵先生ものを含め、多角的に〈作家・遠藤周作〉を見ていくことがこれからの遠藤文学研究の課題となるのではないだろうか。

追記

本文中の『田舎司祭の日記』の引用は『ジュルジュ・ベルナノス著作集2』（春秋社　一九七七年）渡辺一民訳による。

（本学文学研究科　修士課程一年）

研究室受贈図書雑誌目録(六)

新樹（梅光女学院大学大学院）　第七号
信州大学医療技術短期大学部紀要　第17号
神女大国文（神戸女子大学国文学会）　第3号
人文（鹿児島県立短期大学）　第16号
人文學論集（佛教大学学会）　第25号
親和国文（親和女子大学国語国文学会）　第26号
成蹊國文（成蹊大学文学部日本文学科研究室）　第二十五号
成城国文学（成城国文学会）　第8号